

## 乳牛の影響力 ～身近な人を対象に～

京都府立農芸高等学校 農産バイオ科 3年 吉井 愛梨

小さい頃から犬小屋で寝ていた私を見て、母は農芸高校を勧めてくれました。中学生の時、京都府立農芸高校の“農芸祭”に行き、牛を見た瞬間に「この学校がいい!」と母に言いました。すると「遠いけど大丈夫?」と聞かれたので、即答で「大丈夫!」と言うと、心の中で「とにかく牛に触りたい!」「早く牛を近くで見たい!」と思いが立ち込めてきました。入学して1年生の間は農業全般を勉強しました。夏にはトウモロコシ、冬には大根の栽培をしました。収穫した大根は本校最大の祭典“農芸祭”にて販売実習を行いました。栽培の授業はとても楽しく自分が生き生きとしているのがわかりました。

しかし、実習場所へ向かう途中や実習中に、牛たちの匂いが私の鼻を刺激し、再び入学前の気持ちが爆発してきました。友達と一緒に休み時間や放課後に牛舎を訪れ、子牛や成牛に会いに行っていました。手を差し出すと舌を出しペロペロと舐めてくる姿は愛らしく思えました。

ついに2年生になり、やっと牛の世話が出来るとうきうきしていました。放課後の実習の時、私が目にしたのは、搾乳をする機械でした。手に取った搾乳の機械は、とても重たくて、両手を使って持っていました。「こんなに重たいんや、持つのが大変だ」と思っていました。その機械がミルクカーと知り、積極的にその言葉を使っていきました。初めて牛にミルクカーを付ける時、中々うまくいかず、牛の乳頭に付けても、何回も牛に蹴られて落ちていました。「慣れないな」と思っていた日、私はすごく嫌になっていました。「もうしたくないな」と思って、嫌々ながらも頑張っていました。

しかし、ある言葉がきっかけで、私の気持ちは裏返されました。それは、「牛たちは自分たちのミルクを売って自分たちの餌代にしているんやで」という言葉です。これを聞いて、「牛たちはすごい!」と感動しました。仕事をしている人たちと同じ様に、牛たちも自分の場所や餌を、働いて得ているのだとわかりました。そして私たちに、その牛乳を毎日届けてくれていることに感謝し、私たちが生きていくために必要な食べ物をくれていることに強い感動を覚えました。

自分たちが牛たちから絞ったミルクはどこに行くのか?それがすごく気になっていたのですが、先生に聞くと、「メグミルクに行ってるんやで」と言われ、私達が小学生時代の時に飲んでいた牛乳がメグミルクさんだったので驚きました。あの赤い色の上が三角形にとんがっていた箱は、すごく懐かしいと思いました。みんなが飲んでいたメグミルクは、農芸の牛が大活躍して作られたものでした。私は、それがとても嬉しかったので、母に「聞いて!メグミルクの牛乳、農芸の牛のミルクも活躍しているんやって!すごいよな!」と言ったら、

母は、「そーなんか!うちらが飲んでた牛乳は、農芸の牛のミルクでもあったんやな!」と二人で牛の話ばかりしていました。それから母は、牛に興味を持ったのか、毎日聞いてくる様になり、私はそれがうれしかったのでずっと話していました。「今日の搾乳は、何をしたん?」と聞かれ、「プレディッピングして、前搾りして、タオルで乳頭、乳頭孔をきれいに拭いて、ミルクカーを付けてやったよ!牛、二頭も出来たし楽しかった!」と私は言いました。毎回、私が体験したことを話すのが嬉しくてたまりませんでした。

そして、3年生になり、私は搾乳の楽しさを知ってもらいたいと思うようになりました。楽しいだけでなく、勉強にもなり、牛のことをもっと知れるので、牛の良さを広めて、「私たちの牛乳は、こうやってできているんだ」と伝えていく中で、相手は動物なので一歩でも間違えたら大変なことにもなることも伝えます。そのことも踏まえて、牛のことについて知ってもらい「かわいい!」って思うぐらい、多くの人に触れ合ってほしいです。

また、乳牛の共進会に参加して、違う一面も見ることができました。今まで「かわいい」と思っていた乳牛たちが凛々しく、堂々とモデルのように歩いている姿を見たのです。「かっこいいな」と心で思ったことが声に出ていました。体型美が整った乳牛はこんなにも素晴らしくて、心に響くものだと知りました。学校に帰って、さっそく友達に共進会の牛がとにかくすごいことをたくさん話しました。そして一番変わったのは、乳牛の管理実習の時の気持ちです。「もっともっと良くなれ」と思って無我夢中に実習に取り組む自分がいました。自分では気づきませんでした。2年間一緒にいた友達がその変化に気づくほどです。

「乳牛はすごい!」この思いを身近な人に届けたいと思い、さらに弟にも話をするようになりました。弟は、私が牛のことについて楽しそうに話す姿を見てか、高校に幾度となく訪れるようになりました。最初は触ることができなかった子牛にも触れることができ、家に帰って話を聞いていると「農芸高校」に入学すると言ってきました。弟にもできるか心配になった反面、自分のしてきたことを今度は弟がしてくれると思うとすごく嬉しい気持ちになりました。中学時代の友達にも、とにかくかわいいこと、とても大きいこと、暴れると危ないこと、餌代のこと、共進会のこと、自分が乳牛と関わってきて思ったことすべてを話しました。すると「牛のこと好きなんやね。私も農芸高校行ったら良かった。」と言われました。

3年前まで触りたかった牛たちを今度は触らせている自分がいて、入学したかった高校の良さを伝えている自分がいて、その情報を受け取ってくれる人が私の周りにいます。これから出会う人全ての人にその良さを一生懸命伝えていきたいです。学会や何百人の前での講演会などは、私には到底できません。ですが、身近にいる人たちには話せます。乳牛の良さを、酪農の素晴らしさを伝える力を私は持っています。実際に影響された私、それに影響された弟のように、酪農は体験してこそその価値を知ることができます。私は、これからも牛と触れ合っている時間を大切に、残りの高校生活で身近な人にその良さを発信し続け、みんなが

笑顔になる話を届けるように、頑張りたいと思います。酪農の素晴らしさを知ってもらう為に全力で語っていきます。